
リア友！－友人が、リア充だ！？－

翡白 翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リア友！ー友人が、リア充だ！？ー

【Nコード】

N9735V

【作者名】

翡白 翠

【あらすじ】

キモオタ卑屈デブな主人公、多田空太！リア充すぎて女子にもてまくって困っちゃう大山遊！空太が遊に嫉妬しながら、二人は親友を続けている……

異端学園ラブコメです。鬱描写があるので、苦手な方は注意してください。

一話！リア充な友人

ピピピピピピ・・・

目覚まし時計の音が鳴り響く。設定した時刻は、朝の6時半だったか。歩いていける距離にある高校に通学するんだ、もう少し遅くてもいいだろう。

「おーい！ 空太！ 起きなさい！ 朝でしょ！」

母親がうるさく言う。朝なんだから、起きるよ。当然のことだ。だが、俺は眠いんだ。後10分程度寝かしてくれ。俺は眠いんだ。

40分後

俺は眠い目をこすりながら、リビングについた。

「空太遅い。そんなことじゃ、遊くんより早く家を出ることは到底不可能ね」

母親がうるさく言う。9年間以上一緒に通学しているのに、一回も先に出ていないのも悔しいが、俺があいつより早く家を出るのは無理だな。

「明日、明日は頑張るわ……だから、今日は飯を早く食わせる」

「ご飯と言いなさいっていくつ言ったらわかるのかしら……」

母の小言は無視するに限る。俺は食卓という名の布無しこたつに座り、飯を食い始めた。ご飯に……肉団子に野菜炒め。まあ、特別なものではないし、いいだろう。うん。俺は朝飯を食い始めた。

食い終わった後は、着替えて、歯を磨いて、顔を洗って、支度の確認をして、高校に向かう。朝準備していた中学時代に比べて、格段の進歩だな。

母親に挨拶をしてから、高校に向かう。

「いってきます」

「いってらっしゃーい」

弟の靴はなかった。もう家を出ているらしい。正直どうでもいい。家を出ると、親友の姿が目映った。

「よう、遊。おはよう」

「お！ 空太じゃねーか、おはよー。じゃあそろそろ学校に行くか」
高校生活になっても、小学校の頃から一緒に通学した奴だと代わり映えがなくなつてつまらないな。高校になっても、一緒に登校する面子増えないし……

遊と俺は世間話を交わしながら、歩いてた。といっても、俺が昨日丑三つ時まで起きて攻略していたゲームのことだがな。受験勉強の反動は、ゲームに来たらしい。

俺がそのゲームのおもしろさについて、遊に語っていた所だった。
「キヤツ!?!」

名前も知らない美少女がぶつかった。遊に。

「あ、大丈夫ですか？ ぶつかつてしまつてすみません。たてますか？」

遊は、その少女に聞く。俺はその間なにもできない。高校に入つてからは、5度目くらいか。週1より高い頻度で起きている気がする。

ぶつかった美少女は名も言わずに、慌て、謝りながら走り去つていった。テンプレすぎて、つまらないな。パン食つてたし、このパターンは小坊時代から数えると10回は越えてるな。

というか、俺が寝坊したせいだけど、時間やばくね？ っと思つてたところに……

「なんだつたんだ？ まあいい、空太、このままじゃ遅刻する。急ぐぞー!」

「おう!」

俺たちは走り出した。やっぱ、遊は頼りになるな。

二話！視線が注がれるのは友人

ギリギリとは言えないが、比較的遅い方のグループに入った時間で登校した僕と遊は、校門に入った。

遊は歩いている人の7割近くから挨拶される。女子8割男子6割ほどだ。別学年を含め。入学一ヶ月で。

日頃、遊を妬ましいと思うことは多々あるが、登校の時間ほど、『リア充』という言葉を実感するときはない。

俺も同学年の男子の一部とは挨拶する。だが、隣にいる遊を見ると、『リア充』とは遠い世界のものなんだと実感する。月とすっぽん。

俺らは靴箱に入り、上靴を履く。多少遅れ気味なので、少し急ぎ足で歩く。

教室にはいると、降り注がれたのは視線だった。遊への。俺と遊両方へ注がれた視線もないことはない。だが、殆どは遊単体に向けられたものであり、女子の7割は、話をしながらも、遊を意識する遊が

「おはよう」

と言った。つられて俺も、

「おはよう……」

と小声で言う。だが、俺の声がかき消されるくらいの大きさで、クラスの人たちからは、

「おはよう！ー！！」

と返ってきた。

俺と遊は席が遠いので、入り口で分かれる。軽く別れの挨拶をして、席に着く。何もすることがないと、周りの噂話を聞いてしまうのが、『非リア充』と言うものだろう？俺だって例に漏れずそのタイプだ。

鞆の中の教科書類を机に移しながら、周りの話を聞いていると、

俺みたいな奴が何で、遊と一緒にいるのか。という毎朝恒例の噂が聞こえてくる。約3週間も聞かされれば嫌でも慣れ、初期の頃は傷ついていた俺の心は、今では鋼鉄の鎧に守られているようだった。

よくよく、周りの噂を聞いていると、いつもとは違う噂が聞き取れた。なんでも、3年生の先輩の朱音と言う人が、今朝、誰かにぶつかったようだ。

遊じゃねえか。

まあ、俺には関係がない。そう割り切り、朝のHRの前にある朝読書に備え、ラノベを机から出した。

三話！質問がくるのは友人

朝読書が終わり、HRの時間が始まった。俺はラノベの続きを読みたい欲を押さえながら、俺と遊の友人であり、なおかつ学級委員な健介の話を聞いていた。

簡単に要約すると、来月の文化祭で一年は、学校の飾り付けをするらしい。6月5日と6日が文化祭だそうだ。因みに今日はGWが終わり、少し経った、5月13日の木曜である。

文化祭の話題ということもあってか、教室は多少ざわついている。その雰囲気の流れされたのか、普段少々太ってて、オタクと話すことが多い俺に、佐々木葉という女子が話しかけてきた。

女子が話しかけてくること自体はよくある。うん。結構多いんだよ。まあ、質問を聞けば、素直に喜べない理由がわかるだろう。

「あのさ、遊君の好きな食べ物って、何？」
質問がすべて遊関連なんだよ。俺と遊は家も近く、幼なじみだと言ったこともあってか、よく遊び、よく話す。その影響か、結構遊のことを俺に聞く奴は多いんだ。

「教えてもいいけどさ、昼休みに弁当持ってたたり、休みに遊の許可の取らないで、食い物を持っていくと、遊平和公平協定に引っかかるよ？」

この協定は怖い。俺には関係ないけど。
「なんですか？その遊君なんちゃらんなんちゃら協定って言うのは。」
女子でこれを知らないとなると、相当友達が少ないぼっちってことになりそうだ。あと、友達が腐女子ばっかとか？

まあ、俺は親切だと思うので、答える。
「遊平和公平協定ってのは、遊を好きな子が作った。周りに迷惑をかけずに、遊君のアピールをできるだけ公平にの2つを意識して作られた協定だよ。」

事実だ。本当に遊は『リア充』だな。

「なんで、そんなもので、遊君に弁当を持って行っちゃだめなんですか？私の遊君ですよ？」

軽く病んでる？いや、病んでる。怖いな。要注意。

「みんな遊に弁当あげると、遊が10個以上もらうことになるからね。食べきれないし、食材諸々がかわいそうだろう？」

これ作った人は結構いい人だと思う。

「そうですか・・・（でも、無視して持っていけば大丈夫ですよね・・・）ボソツ」

こいつ・・・俺がぎりぎり聞こえる声量で言いやがった。というか、聴覚がいい女子が、確実にこいつに牽制を打ち始めるな。病んでるっぽいし、またやっかいな奴が遊にまわりつく・・・

「因みに、好きな食べ物は何だ。」

遊は子供っぽいところもあるな。病んでるひとに付きまとわれるのはかわいそうだし、爆発しろなんて言うのはやめるか。

HRも、俺たちのクラスは校舎一階と、二階半分の飾り付けの報告が終わったらしい。分担は後日か・・・健介も分担の時は苦労しそうだな・・・

四話！昼食時の友人その1（前書き）

感想とかいただけると、すごいありがたいです！早い執筆速度はできるだけ保とうと思いますが、一話あたりが短いので、実はそのままで早い執筆速度じゃないんですよね。

四話！昼食時の友人その1

HRが終わり、午前中の授業が始まった。俺らが通っている学校は、平均より少し上の偏差値の進学校だ。俺も遊もあとワンランクは上の学校に行けたが、近さというのは大きなメリットになった。

数学の授業で風船を作り、国語の女教師に遊がいじられ、教室の空気が重くなり、体育で太っている俺が死にそうになり、社会で無駄な歴史マニアっぷりを俺と遊が見せつけ、午前中の授業は終わった。

「ありがとうございますー」

健介ではないほうの学級委員が号令を言う。それに続いて、クラスの間々が、

「ありがとうございますー」

と、言った。瞬間。空気が変わった。女子の何割か、遊の席に、弁当をもってダッシュし始めた。動きが早い。今日まで、遊昼食争奪戦に参加していなかった、佐々木は、遊の席に行こうと思っていたのが、完全に出遅れたようだ。

「え!？」

佐々木が素っ頓狂な声を出す。これまでクラスについて無関心だったのだろう、遊の周りもあまり知らないらしい。

「ごめん、昼食はできるだけ、空太とか、健介と食べることにしているんだ」

おい、遊。断っているのはいいが、いつも飯を食っているもう一人を忘れてるぞ。まだ一回も登場していない影が薄い奴だけどさ。案の定、勇次郎は落ち込んでいた。ドンマイ。

遊の周りに群がった女子が、俺への嫌悪的な視線を投げかける。今あげた三人と勇次郎の中で、俺が一番キモオタっぽいんだよな。遊はもちろん『リア充』だし、健介も学級委員として感謝している奴が多い。勇次郎は、がっしりとした体格で、スポーツマンだ。柔

道の大会で好成绩を納めていたらしい。

結果、女子の目が一番向くのは……俺だ。俺みたいななんの取り柄もない奴だと、いくら、キモいというような視線を向けても、後が楽なんだろう。視線だけじゃほかの奴も俺をフォローできないしな。

俺が出て行きにくいことを察してか、健介が、

「ということだ、俺らは男子で組んで飯食うわ。行こうぜ、遊、空太、勇次郎」

やっぱ、健介はいい奴だ。

「「おう」」

俺と勇次郎がそれに応じ、四人で食堂に行った。

四話！昼食時の友人その1（後書き）

どんどん主人公がかわいそうになってきますね

五話！昼食時の友人その2（前書き）

舞台の説明だけで何話使う気なんだよ……

五話！昼食時の友人その2

俺ら四人は食堂に入った。場所の広さ、上級生も含むなどの様々な理由があると思うが、朝の教室にはいった時よりは、遊に視線を向けた人は少ない。それでも、上級生も同級生も遊に注目する奴はいる。入ってすぐの時に……だ。

「じゃあ、席にでも適当に着くか」

遊が言う。この食堂は、弁当を食うのもOKだ。全校生徒が入る大きさが確保されているので、混んでいても、殆ど座れる。

まあ、隅や、飯を作っているところの近くは、結構埋まっているので、俺らは真ん中より少し隅よりに行っただところに座る。少し時間が経ったので、遊に向けられる視線が増えた気がする。

「じゃあ、さっさと食おうぜ」

「もちろんだ！」

遊と勇次郎が先に座る。

それにつられ、俺と健介も座り、四人で

「……いただきます」「……」

と言い、手を合わせる。感謝って言うのは重要だと思っね。

弁当を食いながら、新発売のゲームやら、一ヶ月経ったところでの授業やら、遊ってモテるよな〜って三人が言っつて、遊がそんなことないだろ〜って否定するいつもの風景やらを過ごしながら、飯を食う。因みに、飯を食っている間、遊の周りに着々と、女子が増えている。

遊が、

「ちよつと、軽いもの買ってくるわ」

と、券売機に並ぼうと、席を立つ。同時、その周りの女子がちらほらと立ち、券売機に並ぼうとする。これが『リア充』半端ねえ……

「やっぱ遊君はすごいですね」

軽く笑ったような調子で健介が言う。

「あれが、幼稚園のころからだぜ？」

俺が答える。健介はやれやれといった調子で、それを肯定する。

「まあ、それでも、あそこまでモテる奴も珍しいよな。俺らが入学してから、上級生カップルが減ったって聞くし……」

遊、恨み買うんじゃない？まあ、あいつ喧嘩は意外と強いし、大丈夫か。

「そうなんですか。やっぱ、遊君は罪ですね。生きているだけで、男の敵ですね」

「いや、本当、そうだよな。同じ人間で、同じ性別なのか疑いたくなるからな。特殊なフェロモンでも発しているんじゃないか？」

「告白される頻度は、週3。再度告白される確率は98%。俺が知っている限りだが」

「おかしいだろ……」

遊が戻ってきた頃には、俺らは飯を食い終わっていて、遊が買ってきたおにぎりを食べ終わった所で、俺らは食堂を後にした。

五話！昼食時の友人その2（後書き）

8月25日 変だつたところと誤字を訂正いたしました。

六話！放課後の友人

昼食を取る昼休みが終わった。飯を食った後の、次の授業までの時間は、雑談をして過ごしていた。五月末にはテストもあるじゃないか……と話していて気づいた。

昼休みが終わると、午後の授業が始まる。色々な授業をやると、理系にするか、文系にするか悩むな。得意教科は数社だし。

まあ、そんなこんなで午後の授業も終わり、めでたく下校時刻となった。

勇次郎が俺の所にきた。

「じゃあな。俺は部活行くが、おまえ等は入らないのか？」

部活……か。結構これは悩ましいことである。俺は中学時代卓球部にはいつていた。遊と一緒にだ。健介は中学が違うので知らないが、高校の部活は勇次郎以外の3人は入っていない。卓球とか新聞とか色々行きたい部活はあるが、遊争奪戦にも部活は結構関わるしな……

「考えとくよ。遊や健介にも相談しておく」

「まだ五月だから大丈夫だが、本格的な文化祭シーズンになると入りにくくなるぞ？」

確かになあ。一年は文化祭で結構することがある。完全な裏方雑用で、だ。それが嫌で文化祭が終わってから入っても、変な噂が広がるかもしれない。

「確かになく柔道部では、文化祭何やるんだ？」

「漫才だってよ。ネタでしかねえよ」

勇次郎が漫才をやったらおもしろそうだな。

「まあ、そろそろ俺は部活に行くぞ。遅れるのも嫌だしな」
「わかった。じゃあな」

数分後、俺は遊と家に帰っていた。因みに帰った後、ゲーセン行

こうぜという話は、健介と遊と俺でしてある。近くにゲーセンがカラオケがあると、通いたくなるよな。あんまり、いけないけど。

「そういえば遊、おまえ部活とか入らないのか？」

話題もつきていたし、勇次郎と話してたことでも聞いてみるか。

「部活……ねえ。この学校多いよな」

確かに多いな。なんで進学高校なのに、ロボット部があるんだよ。とか突っ込みたくなる部活も多々ある。未確認生物研究部とかもあつたな。

「確かにな」。未確認生物研究部とか何をやっているんだよって話だよな」

「あそこは結構文化祭の出し物は評判だぞ。未確認生物辞典っていうのを売るらしいが、その本が毎年傑作だ、と親から聞いた」

そういえば、遊の親は、うちの高校のOBだったな。というか、結構昔からあるんだな。未確認生物研究部。

「まあ、あそこに入ろうとは思わないけどな」
遊が言う。

「卓球も続けたいけど、半年ブランクあるのもな」

「まあ、卓球でもいいんじゃないかね？今から野球とか、サッカーやっても追いつけるはずないし。文化部か、卓球安定だろ」

文化部だと、入った部活の女子の社会的立場が危うくなるだろうが。

「文化部だと、やっぱ、ゲー研とか、アニ研とかかなあ」

新聞部スルーかよ。新聞部っておもしろそうだよな？

「個人的には新聞部とかもおもしろそうだけどな」

「まあ、入るとすれば卓球かな」

まあ、うちは強制入部じゃないし、入らなくても大丈夫だろう。

遊を部活に入れようとする工作はあるかもしれないが。

と思ったら家についた。準備するか。

「じゃーな」

「おう、じゃーな」

六話！放課後の友人（後書き）

8月25日 誤字と多少の変なところを訂正。

七話！ゲーセンでの友人

俺は遊と別れ、家に帰った。最低限の身なりを整え、財布をバッグに入れ外に出た。

数分後、遊が出てきた。

「おう、じゃあ、行くか」

俺が言うと、了承という意味だろうか？遊は軽く手を挙げ、俺の方に来た。特に話すこともなかったため、俺が

「じゃあ、集合場所の学校にでも行くか」

と言うと、遊が

「おう」

と言い、俺らは自転車に乗り、漕ぎだした。

学校に行くと、既にそこには健介が居た。軽く手を挙げながら

「よう」

と言うと、健介も手を挙げながら

「よう」

と返してきたので、

「じゃあ、行くか」

と遊が言い、俺らはゲーセンに向かって、ペダルを漕ぎだした。

風が強く吹いていたので、自転車の上では会話ができなかった。

だが、まあいいだろうと思いつつ、俺らはゲーセンへの道のりを漕いでいた。

結構ゲーセンは遠いので、10分程度の道のりを漕ぎ終わったら、体力がない俺は、肩で息をしていた。

「おい、大丈夫かよ、空太」

ガリ勉っぽい見た目とは裏腹に、結構体力がある健介が笑ったような調子で俺を心配する。ありがたいと思いつつながら、

「おう、大丈夫だ」

と返事をする。

「じゃあ、行くか」

遊が言うと、俺らはゲーセンに入ってしまった。

煙草臭さと、機械音の喧噪。眩むほどの、照明に、久しぶりにゲーセンに来た俺は、圧倒されていた。最近を買っラノベが多く、なかなかゲーセンにはこれなかったことをしみじみと思い出しながら、

「おい、遊、何処行く？」

「あー。格ゲーでもやってくるわ」

遊に続き、健介が

「俺はクイズゲーでもやってくる」

と言う。俺はクイズゲーは苦手だし、格ゲーはさらに苦手なので、

「じゃあ俺は音ゲーでもやってくるわ」

といい、3人は別れた。

今日は500円ほど、光る貯金箱に入れた、いつもよりも調子よかったのだが、疲れか、後半に行くほどぼろぼろの戦果になっていった。体力を付けないとなあと考えていると、時間が結構遅くなっていた。

「おい、空太、そろそろ帰ろうぜ」

遊が俺に言ってきた。となりに健介も居る。

「そうだな。腹も減ってきたし」

そういい。ゲーセンの音ゲーを後にする。自転車に乗ったところで、

「じゃあ、俺あっち方向だから。じゃあな」

健介が俺たちの家と逆方向を指して言った。

「おう、じゃあな」

「また明日な」

そう俺らが挨拶をすると、健介は手を振り、走り去っていった。

俺らは、自分の家方向に、逆風に吹かれながら帰った。

かえって、遊の家を見ると、そこには朝ぶつかった奴……噂話によると、朱音が、居た。

七話！ゲーセンでの友人（後書き）

8月25日 多少訂正

八話！突撃された友人

よく見ると、朱音という名前らしき人は、遊のお母さんと話していた

「だ……、遊……は、わ……と……こ……！」

駄目だ。よく聞き取れない。横にいる遊は、朝ぶつかった人が、なぜ家にいるのかがわからないようで、怪訝な顔をしていた。事実、俺もわからないが。

注目していたので、少し自転車の速度が遅くなっていた。

「おい、遊。なんだかわからないが、とりあえず急ごうぜ」

気になったので、少し急かすことにした。というか、話し合いをしないと、状況がわからん。

「そうだな」

と遊が言うと、俺らは数十秒、全力で自転車を漕いだ。

遊の家の前に着くと、まだ朱音というだろう人は帰っていないかった。遊の母さんも困った顔をしている。

「おい、どうしたんだ？ 怪我でもしたか？」

遊が質問する。

「あ！ 遊君！」

こいつ、一瞬で笑顔になったぞ。そんなに会いたかったのか。

「え？ てか、おまえ俺の名前なんで知っているの？」

「確かにな」

噂で聞くこともあるだろうが、写真付きで出回ることは少ないと思っし、家の場所まで着いていたら、ストーリーだろう。

「というか、朝ぶつかっただけで、何で遊の家を知っているんだ？」

疑問が出たなら、質問をするしかないでしょう。

「え？ 調べてきたんだよ」

当然のように言ってきた。常識が崩れ落ちる音がする。というか、遊の母さん、まあ、長いからおばさんにしておこう。おばさんも困ってるし……

「調べたからって、何で家にくるんだよ。というか目的は何だ。朝ぶつかっただけで、何で俺の家にくるんだ？」

「え？ 将来私と遊君が結婚するから、その報告をお義母さんにして来たんだよ？」

常識が10段階位、過程を通り越して崩れ落ちた。

「「は？」」

俺と遊の声が重なる。というか俺、ここにいるのが場違いな気がしてきた……

「だって、私が遊君とぶつかったときにね。電撃というかね。なんかビビッってくるものがあつたんだよ。もうこれは、運命でしかないと思つてね。下僕を使つて、遊君のことを徹底的に調べたんだ」

音符が付くような調子で、目の前の女は言う。女と言うより、ストーカーじゃねえか？というか下僕って何だよ。怖いよ。そんなことを考えていたら、遊が口を開き、

「まあ、下僕云々はスルーして、運命とかもスルーして。まず、俺はおまえのことを知らない。そんな中でいきなり、運命がなんだとか結婚がなんだとか騒がれても、訳が分からない」

運命について、スルーできてなくね？まあいいやそんなことは多分どうでもいい。

「え？ 私と遊君が結婚するのは、運命と言う名の花道によって決められてるんだよ。べつに名前なんて関係ないじゃん。花道に沿っていけば幸せだよ」

こいつの脳内は大丈夫なのか本気で心配になってきた。開いた口がふさがらずに、一気に広げられてるようだ……

「とりあえず俺はおまえと結婚する気などさらさらないし、今、家にこられても迷惑以外の何物でもない。一回ぶつかっただけで運命とか言われても、俺は精神科医を紹介することができない」

遊言い切った。男だけど惚れちゃいそうだね！とかいうと、佐々木とか、お仲間に色々言われそうだからやめておこう。

「そっか……確かにまだ出会ったばかりだもんね！仕方ないね！でも、私たちは運命から、逃げられないんだよ！」

納得したに思えたが、後半はお花畑になった。そうしたら、車の音がした。振り返ると、高級車としか、表せないような車があった。中から出てくる黒服。一瞬俺と遊が身構えると、

「朱音お嬢様、今帰らないと、お夕食の時間に間に合いません」

「しょうがないなーわかったよ、安藤」

そう言った後、遊の方を振り返り、

「名前くらいは覚えてもらわないとね！私の名前は北条朱音だよ！」

「そっいい、嵐のような出来事は、車とともに去っていった……」

八話！突撃された友人（後書き）

8月25日 多少訂正

九話！朝に突撃される友人

北条が車で去った後、とりあえず遊が

「まあ、色々あったけど、じゃあな。また明日」

と言ったので、俺も、

「おう、また明日」

と返した。日も暮れていたもので、急いで家に帰り、チャイムをならすと母親に小言を言われた。

意外に時間が経っていたので、夕飯は急いで食った。野菜炒めだったが、焼き肉のタレと野菜炒めの相性は推し量れないと思う。野菜炒めは俺を胡麻アブラー（マヨラー亜種）にした張本人だ。敬意を表しながら食べなくてはならない。急いで食べたけど。

夕食も終わったので、勉強を始めた。予習復習は大事だ。必要だ。学校の授業で風船を浮かべないために必須だ。今日は浮かべてた気がするけど、気にしたら負けだ。

一時間程度かけて、予習復習宿題等々をこなした俺は、インターネットを始めた。1時間くらいやったら、マンガでも読むかと思っていた。うん。そのころはそう思っていたんだ。ただ、音ゲーのwikiを見始めて、そこから、ネット上の音ゲーに派生しなければ。

4時間経っていたよ

現在時刻11時30分。とりあえず風呂に入る前に、腹が減ったので、夜食を食った。だから太るんだよな。うん。その後、風呂に入り、自室に帰ったのだが、1時間半以上電腦世界の網に捕らわれ、寝たのは2時近くだった。明日こそは遊より早く家を出ようと思っただ、昨日の決意は消え、明日こそ早く家を出ようと、毎日のように繰り返す寝る前の一言を言った後、寝た。

翌朝は、昨日とたいして変わらなかった。寝てて、起きて、寝て起きる。要するに二度寝だ。まあ、それくらい神様も許してくれるだろう。うん。

昨日と違い、準備を忘れていたので、多少遅れたな〜と思い、家を出たら、

黒い車と赤い絨毯があった。

赤い絨毯は遊の家の前に向かってひかれている。

「は!？」

と、声が出たのも不思議ではないだろう。あれ、黒い車、なんか見たことがある……

「おはよう……空太……」

遊がやつれた声で俺に挨拶

をしてくる。

「どうした!？」

「いや、北条がさ、なんか、朝から家に来ているんだよ。赤い絨毯を持って」

と。絶句した。行動力がやばい。なんだ、あいつ。早く何とかしないと。

「おはようございます。空太さん。今日遊君は私と一緒に登校するので、先に行っていたけるとありがたいのですけどね」

横暴だ……ここまでいくと逆に尊敬は……しないな。

「おい!？ ちょっと待て！ 俺はおまえと登校するとも、空太と登校しないとも言っていないぞ！」

遊が反論した。こんなにも俺のことを考えてくれるなんて、いい奴だなあ。

「じゃあ、遊君は私と登校しますね。さようなら、空太さん」

は!？ 話がいきなり変わった!？

「だから、俺は空太と登校するって何度言えばわかるんだよ!」

「だって、私と遊と一緒に登校するのは、運命で決まっていますの

で

「俺は、そんな運命知らないぞ！ 他人の知らない運命に勝手に巻き込むな！」

「私と遊君は他人ではありませんわ。いわゆる許嫁という関係でしょうか」

「そんな関係、なつた覚えねえよ！」

「もちろんです。今私が決めたのですから」

俺はどうすればいいのだろうか……

「お嬢様。そろそろいかないと、学校に間に合いません」

「遊君が車に乗ってくれたら、学校に行くわ」

北条が執事とはなしているときに、遊は俺の方を向いて、首を振った。

成る程。そういうことか……

俺と遊は学校に走った。

十話！待ちかまえられる友人

走った。凄く走った。北条を振り切るため、全速力で俺たちは走った。体力がない俺が着いていけるはずもなく、後半は息も切れ、歩いているような状態だったが、車が通りづらい道を通ったことがよかったようで、やり過ごすことができた。

昨日より、ギリギリに近くなった校門を通ると、

北条がいた。

遊は驚いた顔をし、俺は呆れてる。凄いと思うけどさ。凄いいけどさ。犯罪すれすれじゃないのか、とため息混じりなことを心の中で呟く。

「さあ、遊君！ 私と一緒に登校してよね！」

はたして、校門から、げた箱までの道のりを登校と言っのかは、甚だ疑問だな。

「もう登校って距離じゃねえだろ……というか遅れるぞ……」

遊がため息混じりに呟く。まあ、確かにギリギリだし、ここにいっても仕方がない。というか、北条は入学式で見かけなかったから先輩だろう。敬語は……ストーリーカーに敬語は使わなくていいな。うん。軽く遊と目配せして、

俺と遊はまた逃げた。

昨日の3倍のスピードで朝の支度をやる。担任に小言を言われたりしたが、気にしたら負けだ。内心に響かないといいな。

昨日の続きのラノベを読もうとしたら、三井維織が、話しかけてきた。

ちなみに三井維織は、遊平和公平協定の中で権力が強く、軽く（？要検証）オタクが入っているので、情報収集をかねて、俺によく話しかけてくる。

「朝、校門凄かったねーどうしたの？」

「先輩？の北条って奴が、いきなり遊にアタックしだした。以上」

「これはやっつかいなライバルがまた増えましたねー。また、工作しないだよ」

裏工作の先導の4割近くが三井がやっている。地味に凄い。

「え？何かあったの？」

佐々木が話に入ってきた。

「先生に睨まれているから、後でな」

そう言つて、俺は読書を開始した。

今日のHRは特に語ることもなく、せいぜい文化祭の説明程度だった。場所の細かい割り振りは来週の火曜らしい。激戦が予想される。

「それで、朝、なにがあったの？」

佐々木が俺に再び聞いてくる。後ろの席の三井が、

「朝、北条先輩がさー遊に果敢なアタックをしたらしくてねー」

「え？」

そりゃあ遊がモテるのを知らないなら、こんな反応か。あのストーカーっぷりを見せつけたらどうなるのかね。

「ああ、朝は大変だったぞ」

遊が来た。それにより、女子の笑顔度が三割上昇！これが『リア充』効果ニコポか。何か違う気がするけど。

「ちなみに、遊の言家まで押し掛けてきた。走って逃げたけど」

俺が付け足した。

「強敵だねー」

「私の遊君に……」

二人とも遊に聞こえない声量で呟く。

「にしても、朝大変だったねー遅れたのはそれが原因ー？」

「半分はな」

遊が素っ気なく答える。

残りの半分は俺が遅いんですね。遅くてすみませんでしたね。話題そらすか。

「というか、遊、北条はどうすんの？」

聞いとかなきゃまずいだろ。

「逃げる！」

無計画だなーと思ってたら、チャイムが鳴り出した。午前中の授業が始まる。急いで準備をしなければ。

十一話！攻防の友人その1

行動は素早かった。三井の行動は、俺が予想するその上を行っていた。休み時間、昼休みにも北条の攻撃（遊へのアタック）があると、三井は予想した。

「遊君、北条、じゃま？」

一時限目が終わった後そう遊に聞いた。遊は

「付け回したり、家にまで突撃されたり、校門で待ちかまえられたり、結構嫌だね。男友達とのんびりつるみたい時だってあるのに……」

「じゃあ私たちが北条さんにお話しとくね！」

某魔法少女（？）かと突っ込みたくなったが、やめておく。遊に言質をとった後三井は、遊平和公平協定議会上層部のクラスの面子と相談し始めた。

その間、約3分。その時、廊下に激震が走った気がした。

「遊君！ さあ！ 運命の花道を歩くため、一緒にデートしましょう！」

北条がきた。一年の教室は2階。三年の教室は4階。俺らは一組で2組以降のクラスとは結構な距離がある。どの学年でもそうだ。

一組じゃなかったら早すぎる。一組でもぎりぎりの早さだと俺は思った。因みに、大層なことを俺は、考えているが、実際は机でラノベを読みながら、周りの状態を把握している。『非リア充』スキル静かなる聞き耳だ。厨二かよ。

「休み時間に来られても、迷惑なんですけど……」

強く断れない様子で遊が答える。まあ、走ってきた相手を断るのは勇気があるだろう。俺は全速力で走ってきた美少女からデートしようと言われるイベントなんて一回も起きたことがない。でも、数年前に一緒に飯を食おうならあったな……遊も一緒だったけど。あのころは結構楽しかったな……

俺が感傷に浸っていると、北条が

「休み時間だつて、運命で決められてるのだから、行きましよう！」
運命とか、花道じゃなくて、単なるわがままだな。うん。遊も大
変だ。

「いえ、次の時間の準備と軽く予習をしたいので」

「保健体育の予習ならさせてあげるわよ！」

前の方の席から、鼻血がでた音がする。休み時間に大声で話すこ
とじゃないな。絶対に。

「いえ、次の時間は数学なので、公式を覚えたいんですよ」

遊はえらいなく三井と議会の面々は、まだ話し合いをしている。
と思つたら、意見がまとまったようだ。

一人が、遊と北条がいる教室後ろからではなく、教室前から走り
出した。三井は携帯をいじりだす。もう一人が、クラスの友人のと
ころに行き、頼みごとをしていた。鼻血を出した奴は復活している。
非常にどうでもいいが。

「数学くらいできなくても、将来困らないわよ」

いや、受験生だろう。いや、二年かもな。そういえばさつき三年
生だと決めつけていたけど、二年かもな。

「いえ、受験に困るんでな。内心にも響きますし」

さすが遊。大学への挑戦は万端にしておきたいようだ。まじめだ。
同じようなことを考えていた、俺もきつとまじめなのだ。休み時間
にラノベ読んでいるけど。

と思つたら、さつき頼みごとをされていた。女子が動き出した。
渋々動き出したような表情だ。

そうして、後ろのドアに近づき、

「先輩ーこんにちはーうちのクラスになにか用ですか？」

勇気ある行動をとった。遊と満面の笑顔で話していた先輩に近づ
き、堂々と話しかけた。

北条は露骨に嫌な顔をしてから、

「チッ！」

と大きな音で舌打ちをして、すぐに笑顔に戻ってから、

「聡子ちゃんじゃーんーここ聡子ちゃんのクラスだったのー？私知らなかったー」

女子って怖いな。頼んでた奴が、部活の中で、遊君とターゲットの接触を妨害する作戦……名付けて、部活の友情は愛を越えるよ！

……とかつぶやいているし。女子って怖いな。

十二話！攻防の友人その2

笑い声が聞こえてくる。作り笑いか本心からなのか、はたまた、遊の前で悪い顔を見せたくないのかがわからないが、北条と霧島（聡子）は笑っていた。

少し、汗をかいた様子で、教室からダッシュで行った子が戻ってきた。さらに、三井が携帯を閉じると同時に、一限目の休み時間は終わった。遊は、北条の目力に対抗できなかったのか、公式は覚えられなかったらしい。

公式を覚えなかった日に限って、遊がよく指され、数学教師のおじさんが女子に非難された目で見られてた。温和でいい人だと思うんだけどな。因みに、前日予習してきた俺は、全く当てられなかった。

チャイムと共に、二限目が終わった。今度も北条が来そうだな、と思っていること7分間。北条は来なかった。4分目くらいの時に三井が

「作戦は成功しているようだね……」

とか呟いていることがも関係あると思う。俺は、歴史の予習をする必要はないので、ラノベを読んだ。

大体5分目位の時だっただろうが、遊が俺に

「何の本を読んでいるんだ？」

と聞いてきた。遊と昔。ものすごく史実に則ったボードゲームで遊んでいたの、俺と遊は無駄に歴史が得意だ。なので、遊も俺もわざわざ歴史の予習をすることはない。

「これか？ 禁書だよ」

「禁じられた書物の在処」と言うラノベだ。結構売れているので、買って見たが、魔導書派と、聖書派の争いのファンタジーバトルだ。売れているだけあって、面白い。

「あれか、あの、かなり売れている奴。人気のくせに微妙にたたか
れている奴だ」

「まあ、人気作は叩かれるって言うしね」

7分。気配。後ろのドア。北条。

「遊君！」

怒鳴りつけるような声が出た。

三井が、あの戦力だと持つのは7分か……以外と持つな。とか咳
いているし、佐々木は、チツまたあのアマかよ。みたいな感じにな
ってる。怖い。

仕方ないから俺は、またラノベに目を戻し、静かなる聞き耳で、
周りの情報を得ることに、専念……してないな。ラノベ読んでるし。
「やっとあえた！ 道行く人がみんな私に声をかけてくれたんです
よ！一年生が多かったなので、私の一年からの人望は、鰻登りにあが
っているようですね！」

これが作戦2か……というか、他の人を使って間接的に妨害して
いるのか……怖いな。

遊が渋々後ろのドアに行く。ストーカーにかまうとか、流石遊。
いい奴だな。

「何のようですか？」

若干語気が荒い。そういえば遊はファンタジーバトルものが大好
きだったな……ファンタジー談義をしたいのか……俺は「神様が捨
てて落とした日曜日の世界」の方が好きなんだけどな。いや、禁書
も面白いよ。

「多少怒っている遊君も格好いいね！ さあ、三分だけだけど、私
とお話しましょう！」

the強引だな。すげえ。怖い。二次元サイコーだと認識できる
な。

「お！ 北条先輩だ！」

十秒後、北条は、他の一年に連れ去られていった。これが、後2
回続き、4時限目は終わった。

十二話！攻防の友人その2（後書き）

メタネタ多いですね……次回から自重します。

十三話！追いかける友人 *side* 北条（前書き）

これからは、空太以外の視点も入れようと思います。

十三話！追いかける友人 side 北条

四時限目が……終わった。四時限目の前の休み時間は、いろいろな人と会うことが多く、遊君に会えなかった。はじめの休み時間以外は、遊君に会えた時間は短かった。私の人望のおかげだが、もつと遊君に会いたかった。

だが！ 今からは昼休み。遊君と一緒に弁当を食べるチャンスだ。弁当派は、教室からでないだろうから、あまり話しかけられないはず。更に、下僕に調べてもらったから、遊君が弁当派だというのは、把握済み……

「朱音様！ 本日の昼休みは、私共めと、昼食をご一緒しては如何でしょうか？」

下僕（同級生男子の内、特に好意を持ってくれているもの）の堺が、昼食のお誘いをしてくる。下僕同士で固まっているようだ。代表で堺が来たのか……

「今日はいいわ。また今度よろしくね」

女子からの風評は決して良い方ではないと自覚している。昼休みは下僕と食べた方が、何かと都合がいいし、気楽だ。さてと、遊君の教室にでも行きますか。

遊君の教室、一年一組には、遊君はいなかった。素っ頓狂な声で、なんで！？ と叫ぶのを我慢して、手近な……ちょうど良い。聡子がいる。

「おーい！ 聡子ちゃん！ 遊君知らない？」

結構大きな声がでちゃったけど、別に問題ないだろう。視界に見えた女子が何人か嫌な顔をするが、気にしない気にしない。

「あー、遊は、食堂にいつていると思います」

聡子が答えてくれる。でも、食堂？ 変ね。下僕共に調べてもらった限りでは、遊君は弁当派だったのだが、

「遊君って、弁当でしょ？」

いや、遊君自体が弁当な訳じゃない。

「あー、そうですね。でも、毎日食堂で食べてますね」
食堂で弁当食べるって珍しいわね。

「ありがとーまたねー」

「ではまたー」

そう聡子と挨拶をすると、食堂に向かった。

騒がしい。私は、教室 de 弁当派なので、食堂に来ることは少ないのだった。騒がしい中で、明確に女子が多い場所を見かける。その近くにいたのは……

遊君

結構もてるわねーとか思いながら、遊君の席に近づき、

「遊君！ 一緒にお弁当を食べましょう！」

さあ、これで、ラブラブであーんなお昼展開が……

って、周りの、キモオタとマッチョとガリ勉が嫌な顔をしているな。何でだろ？

「いえ、俺は空太と健介と勇次郎と飯食っているので、今日は遠慮しときます」

懸命に頼み込んだら、遊君だって、了承してくれるはず！

「そんな、キモオタとマッチョとガリ勉なんか気にしないで、結構かわいい私と、一緒にお昼を食べた方が、目の保養になるわよ！」

ここまで、いったら大丈夫だろう。と思っただが、周りのキモマッチョ勉三人組は怒ってるし、なんか、結構な人数が引いている気がするが、気にしたら負けだよな！

「いえ、僕は空太と健介、勇次郎と食べる方が楽しいので。残念ながら先輩のご期待に添うことはできません」

丁重にお断りされた……仕方ない、作戦 No. 番外。『誘えなかった時の対処法』を発動させるときなのね……

「じゃあ、食べ終わった後、校舎を回りますよ！」

美少女からのデートのお誘いとあれば、断ることは……先刻断られた気がするけど、気にしない気にしない。

「いえ、この後も予定がありますので……」

なんだと！ほかの作戦は……

隊長！ほかの作戦が見あたりません！

なんだって！？朱音脳内分隊6隊目隊長の朱音6号君！それは本当のことなのか！

申し訳ありません！隊長！

八方ふさがりになった朱音は、トボトボと教室に帰り、一人で昼食を食べた。

十四話！追いかける友人 side 多田

四時限目が終わると、遊が、誘ってくる女子を断っているところだった。俺は少し時間ができると思ったので、机からラノベを出して、読んでいた。文字を追っていたとき、遊が近づいてきた。女子を追い払い終わったのだろうか。

「空太、飯食い行くぞ」

遊がそう言う。俺が答えようと、口を開きかけた。

その時。タイミングを見計らったように、三井が出てきた。

「おーそれ禁書じゃん。最近のバトル物でも、結構おもしろいよねー」

バトル物って言っちゃったよ。遊が食いつくな。確実に。

「おう！ やっぱそう思うよな！ 禁書は超能力バトルでも、一級品だよな！」

案の定遊が食いついた。

「じゃあさー昼飯の後、ラノベ談義しない？ 不本意ながらこいつも入れてさ」

遊とデートとして、ラノベ談義をするらしい。え？俺が指を指されているって事は俺もか。

「おう、わかつたぜ。空太もいいよな？」

今まで一言もしゃべっていなかった俺に振ってくる。いや、喋ろうと思ったら他の人が喋ってるだけだよ？

「おう。わかつた。じゃあ、飯に行くか」

さすがにこれ以上待たせたら、そばにいる健介と勇次郎が可哀想だ。

食堂に入った俺たちは、昨日と近くの席に座った。昨日の席はもう女子に占領された後だった。二日連続で同じ場所に座れるのはなかなか無いんだよな。

「よし、じゃあ食うか」

遊が言う。

「おう、そうだな」

勇次郎が答えると、俺たちは飯を食い始めた。

昨日と同じように談笑をしながら、食べていたとき、北条が来た。まあ確かに学校の中で昼休みはチャンスだろう。長いし。

そう思っていると、北条がこちらへ近づいてきた。そして、

「遊君！ 一緒にお弁当を食べましょう！」

今俺たちで食っているのが見えないのか。入念的なことを言うのが普通だろう。

「いえ、俺は空太と健介と勇次郎で飯食っているんで、今日は遠慮しときます」

遊が丁寧な物腰で、言い返した。まあ、周りに人が結構いるし、大勢の中先輩にタメ口を使うのは、厳しいだろう。

「そんな、キモオタとマッチョとガリ勉なんか気にしないで、結構かわいい私と、一緒にお昼を食べた方が、目の保養になるわよ！」

おい。この人自分で自分のことかわいって言っているぞ。公衆の場で。大声で。痛いな。しかも俺のことキモオタとか言っているし。酷いな。マッチョは褒め言葉な場合もあるが、勇次郎は軽くキレてるな。言わずとも、健介もキレてる。まあ、俺もだが。遊も不快感を露わにしているな。北条は気づいていないようだけど。

「いえ、僕は空太と健介、勇次郎と食べる方が楽しいので、残念ながら先輩のご期待に添うことはできません」

全力で引いているのがわかるほどの畏まりぶりだな。

北条が少し残念そうな顔をしてから、

「じゃあ、食べ終わった後、校舎を回らましょ！」

まあ、このくらいが妥当だろう。もう遊は予定があるわけだが。

ラノベ談義という遊の能力バトルオタクに全力で拍車をかけるような予定が。

「いえ、この後も予定がありますので……」

そう遊が言っていると、北条はトボトボと教室に帰っていった。その後俺らは何事も無かったように、弁当を食べた。

十五話！発作を起こす友人

教室に帰ると、三井が待ちかまえていた。俺じゃなく、遊を。まあ、2%くらいは入っているだろうと、軽い期待を寄せながら、

「やっぱ、禁書よりも神曰じゃね？」

と、俺から話を始めた。

話に熱中していたら、五時限目の時刻となっていた。仕方無しに話をやめて、授業の準備をする。授業が始まると、前日の夜更かしと昼食を食べた後という二つの条件が重なったためか、俺は眠りに入っていた。

帰宅時刻。遊が

「帰ろーぜ」

というので、俺が

「おう」

と答え、俺らは昇降口に向かっていた。今日は五時限の日課だったので、一時間まるまる夢の世界の招待されていた俺は、眠い目をこすりながら、遊と階段を降りた。

「遊君ー一緒に帰りましょー」

またか。北条の声がする。そろそろワンパターン化が進んで俺が飽きてきた。遊平和公平協定の面々はそろそろもう少し具体的な対処をしてほしいな。日本国民が政治に向ける関心くらいのレベルで祈っておこう。

「あー、俺は空太と帰るから」

断り文句をはっきり言えばなんとかかなりそうだな。俺からも少し言うか。

「そういうことだ。じゃーな。適当な下僕でも引き連れて帰ってりゃいいじゃねーか」

あ、怒ってる。下僕みたいなのから責められたらどーするか。別に喧嘩にならない限りいいや。陰口とかなれているし。

「いや！ 遊君は私と帰るのよ！ さあ、遊君！ 行きましょう！」
そう言つて、北条が遊の腕をつかんだ。

こんな女と遊の奪い合いみたいな格好になつちまつたじゃねーか。と、思つたら、遊が北条の手をふりほどいた。微妙に顔が赤い。そして……震えている。恐怖。

「え！？」

北条が驚く。そんな事も気にせず遊が走り出す。俺もそれに続いて走る。北条はなんで、腕をつかんだだけで、遊が逃げ出したのかがわからず、怪訝な様子で立ちすくむ。

昇降口に来た。

「おい！ 遊！ 大丈夫か！」

「ああ……何とか……おさまつた……結構回復……したと思つたが……まだまだ……完全回復には遠いな……」

やっぱ、遊の女性恐怖症はなかなか直らないな。話すだけなら大丈夫なんだが、過剰なスキンシップをとるところなる。

「まあ……なんとか大丈夫だ……少し……胸に当たつたから……いつもより激しいだけだ……」

「無理はするなよ。今日はゆっくり帰ろうぜ」

そう言いながら、俺たちは靴を手にした。

十五話！発作を起こす友人（後書き）

短すぎですね……反省します

あと、女性恐怖症についての知識が、僕にはあまりありませんので、あくまで、物語上のこととして扱ってもらえると、幸いです。

十六話！襲撃される友人

遊の発作が収まり、それぞれの家に帰った後、俺は考えていた。どうしたら、遊の女性恐怖症が直るのか……

だが、答えは出ない。特に特技はなく、平々凡々な高校生（体型と運動能力はマイナスだが）と言っても差し支えがない俺は、そんな大それたことを、考えつくはずがなかった。

仕方なく、昔読んでおもしろかったラノベを再読したり、ネットを適当に回ったり、オタクっぽい行動をしていた。

そんなこんなで過ぎた、金曜日。風呂に入っているときに、明日遊と遊ぶ約束をしているなーと思いだして、風呂から上がった後は、速攻で寝た。

土曜日。朝起きたのは遅かった。部活にも所属しておらず、特にする活動がない高校生なんてそんなもんだろ？違うと言った奴はリア充（断定）。

午前中はダラダラ過ごし、昼飯を親がいないことを確認してから、仕方なく自分で作った後、遊のところ遊びに行った。

俺の部屋は人様を呼べるほどきれいじゃない。カードゲームに使うカードやらラノベやらが乱立している。それに、学校でもらったものも乱立している。

「こんにちはー」

「ああ、空太君じゃない。久しぶりねー」

遊の母さんだった。一昨日会ってから久しぶりなのか、そのことは忘れて、久しぶりなのか判断できず、とりあえず

「ひさしぶりですね」

と当たり障りのない返事をした。

「遊ねー部屋にいると思うから、上がって上がってー」

いい人だ。うちのどこかずれている母親と接している時点で十分いい人の中に入る。

「はい。ありがとうございます」

最大限の敬意を払い、返事をした。そうし、整頓しながら靴を脱ぎ、上がった。

俺は遊の部屋に行くため、階段を登った。そして、ドアを開け、

「おい遊ー遊ぼうぜー」

と言った。

「おーう」

「なにするー？」

「もうそんなの昨日はなしたるー」

そういえば、昼休みのバトルラノベ談義から、バトルTRPG（机上で、サイコロを使って遊ぶボードゲーム）談義に派生して、そこから、二人じゃTRPGはできないこともないが、つまらなくなる可能性が高いから、二人用ボードゲームやるうぜーって話だったな。

「ボードゲームはわかるが、なにやるー？」

「将棋でよくね？楽し」

「まあそうだなー」

そう言ったときだった。

「遊君！居る！？」

大声で北条の声がした。遊に昨日怖がらせたことを解っていないのか……理解できない。傍をみると、遊は、多少ふるえていた。

「おい、遊大丈夫か？」

「昨日のを多少思い出しただけだ。直に収まる」

「そうか。俺が応対してくるか？」

「ああ。できれば家に入れないで来れ。また思い出すのが怖い」

「了解」

そう言うと、俺は、階段を降りた。おばさんが多少困った表情を

している。俺が、北条に言った。

「おい、お前が昨日遊にしたこと解ってんのか？」

多少怒気を伴った声だった。

「ええ。解っているわよ。だからこそ、今日はお詫びのお菓子を持ってきたわ。お義母さん、昨日はすいませんでした」

そう言っつてペコリと頭を下げる。おばさんは怪訝な顔をしてる。

遊め、昨日のこと言っていないな。

「おばさん。昨日遊と、この……北条が、ぶつかっただですよ。その時に当たり所が悪かったのか、発作が再発してしまいました。軽かったので、大丈夫ですが」

おばさんは

「あらあら、そんなことがあったのー」

と言いなから、リビングへ菓子を持っていく。

「それで、今日は私も一緒に遊ぶわよ！」

「いや、遊は、帰ってほしいと言っていた。昨日の今日だ。悪い」

「大丈夫だと思うよー」

そう言いなから、家に入り始めた。俺は疑問符しか思い浮かべることができなかった。

十六話！襲撃される友人（後書き）

更新が遅くなり、申し訳ありません。今後は以前のような速度を保つのは厳しいと思います。

十七話！暴走を始める……二人。中には友人（前書き）

多少TRPGの用語の解説を。

オンセ……ネット上でセッションをやること。

セッション……TRPGをプレイすること。

シナリオ……GMが、敵モンスター、話の流れ、話の場所、罠などを決めたもの。セッションではこれを使う。

GM……セッションの進行者。セッションはGM一人（場合によってはサブGMがいる場合もある）とPLプレイヤー二人以上（一人でもできないことはない）で行われる。

まあ、ググれば大体わかると思います。少しでもTRPGに興味を持っていただければ、幸いです。

十七話！暴走を始める……二人。中には友人

家上がりだした北条を見て、一瞬呆気にとられた俺だったが、すぐに元に戻り、

「話、聞いてたか？」

と、一言言った。

「聞いてたよ？私がいっても特に問題ないと判断したから、大丈夫だと思っただけだよ？」

「いや、おまえはいいと思っても、遊が快く思わないだろう」

「そんな、決めつけは良くないよ。遊君は、私にメロメロな筈さ」
楽観的思考すぎる……北条の将来を本気で心配になった。

「いや、メロメロなら、発作とか起こさないから。普通に考えて。後、遊が断っているのに入ってくるのもどうかと思うんだが……」

「大丈夫だよ！私ボードゲームは結構得意だよ？混ぜてくれても損はしないね！ボードゲームは人数多い方が楽しいものだからね」

その言葉に、俺は一瞬固まった。北条が言ったとおり、ボードゲームをやるときに、人数というのは大事な要素だ。二人でババ抜きや、人生ゲームをやっても楽しいわけがあるまい。

悩んでいる俺を見て、説得は終わったと勘違いしたのか、いや、半分くらい終わっているかもしれないが、北条は階段を上りだした。ちよっ！おい！と、止める俺の声を無視して、遊の部屋に入っていた。

結論として、俺と北条は正座させられていた。遊に。遊は北条が入ってきた時から、一分ほどふるえていたものの、何とか平静を取り戻し、

「空太！入れるなっただろ！北条！何でおまえが来るんだ！」
と怒気がこもった声で叫んだ。熱血教師っぷりを発動したのか、

正座しろ！正座！とか言い出して、現在に至る。

「といたしますのも……北条さんがボードゲームに詳しいと言いまし
て……それなら……と一瞬迷った隙に、階段を駆け上げられてしま
まして……」

しどろもどろになりながらも、何とか弁明をする。

「北条、おまえは本当にボードゲームができるのか？」

「もちろんよ！オンセだって、何回もやったことがあるわ！」

オンセまでやっていたのか……俺は遊と中学時代の友人何人か
やるが多かった。オンセは俺はやったことがない。

「オンセか……結構あれは勇気がいるよな……」

ボードゲームどころではなく、オンセとなると、TRPGの中
も、結構な熟練者がやるものだと思っっている。スカイプありか
はわからないが、それを女子がやるのは、珍しいだろう。

遊が、数刻迷ってから、

「なら、俺のシナリオをおまえ等でクリアできたら、許そう！ル
ルはSWだ！」

親友まで暴走し始めて、俺は困り果てた。

十八話！遊ぶ友人（前書き）

遅くなってすいません。少し色々ありました。TRPGがわからない方は、フィーリングで、読んでいただけると、有り難いです。

十八話！遊ぶ友人

さて、困った。遊の奴、本気で俺らを殺しに来ている。

TRPGが始まった。初心者もいるし、ゲームバランス的にはぬるめだと思っていたのだが、予想外にも、予想外。本気で倒せるか倒せないかぎりぎりのレベルの敵を用意している。

「遊君！ 大人げないじゃないですか！」

隣にいる北条もそれは理解していて、遊を非難している。

「はてさて、なんのことかなあ」

そう遊がとぼけながら、戦闘が始まった。

結果、惨敗。

TRPGのダイス運ってすごく重要だよな。適正レベルぎりぎり+GMのダイスが、6ゾロは3割くらい出るし、平均値で10越えている気がする。

「いやー久々にGMで勝ったなー」

白々しく遊が言う。

「酷い……酷いぞ、遊……見損なった。初心者がいる卓で、鬼畜GMとか、酷すぎるぞ……」

とりあえず、俺は毒づいた。いや、だってさ、適正的なバランスって重要だよな。賭の時に条件付けとけば良かったな。

「まあ、俺は楽しかったよ。鬼畜GMの対処法とか見れたし」

ゲーム中に知ったのだが、案外健介はTRPGに興味があったらしい。重度のラノベオタ（俺とお仲間）だから、リプレイにも手を出していたらしい。

「それにしても、遊君！ 酷いですよ！」

北条が喚く。うるさいな。すごくうるさいな。うん。

「北条先輩も静かにしてくださいよ。ダイス神の導きですって」

健介が北条をなだめる。いい奴だな。と俺が思っていると……

「俺が鬼畜だろうが鬼畜じゃなからうが、どうでもいい……だが、約束は守ってもらおうぞ？」
怖いなーと、思いながら、遊の次の言葉を待った。

十数分後。北条は出ていった。いや、俺は悪くないよ。確かに少し前は凄いゴネてたけどさ。

「うるさかったなー」

と、遊。北条のあしらい方は、覚え始めたようで、約束させれば、大丈夫らしい。

「というか、健介、空太、これからどうする？」

「どうするかー悩むね」

遊の問いに、俺が答える。今日の目的のボードゲームは終わっている。というか、ボードゲームが終わった後の時間………やばかね？

TRPGは基本的に何時間単位でやるゲームだ。ようするに。

「おい、遊、健介、たぶん外真っ暗だぞ」

「「は？」」

そうして、三人で見た窓の外は、夕焼けに染まっていた。

「「まじかよ！」」

二人は叫ぶ。

「というわけで、俺はそろそろ帰るわ。飯抜きにされたらたまらん金的に」

我が家では、飯に遅れたらぬ気という家則があるのだ。

「おう、俺も帰るわ」

そう健介が言うと、

「じゃーな、二人とも」

と、遊び足りない様子で、遊が言った。

十九話！友人との平和な日々（前書き）

タイトルの語尾友人縛りが辛いので、タイトルの中に友人を入れる
風にします。

十九話！友人との平和な日々

週があけた月曜日。俺は六時半に起きた。それ自体に特に意味はなく、いつもより少しはやめに起きたな、と思った。

大体の登校準備が終わっても、時間は余っていた。予習復習を朝にやるような性質でもないし、早く家を出るかな、と思い、家を出た。

ドアを開けると、遊は居なかった。ああ、いつも俺が遊より遅いのは、時間が余ると、ネットをやってしまった、結局ギリギリの時間が出てくるのだな、と妙に納得した。

そんな感じであれこれ考えていると、遊が出てきた。

「おう、空太。今日は早いな」

「おはよ、たまたま早く起きてね」

たわいもない朝の挨拶。それが終わると、俺たちは雑談をしながら学校に向かった。

いつもと変わらぬ登校風景。時間は早いので、北条の待ち伏せは無かった。反省しているといいな、と心の中で思いつつ、歩いていると、横から、誰かの声がした。

「おはよー遊君と……空太君」

「ついでっばいな。気にしたら負けか。」

「おう、おはよう、三井」

声をかけてきたのは三井だった。続けて俺も、

「三井、おはよ」

と、挨拶を返す。そして、自然な流れで、三井は俺たちに合流した。

「なんか、おもしろいらノベはあったかい？」

三井が俺ら、95%以上は遊に聞いてきた。

「ねーな。買いに行ってもいないしな。空太はどうなんだ？」

「遊に同じく。ネット上では、なんだっけ？農業物？が面白そうだった」

「ストーリーとか雰囲気だけ覚えて、タイトルを忘れること……あるよね。」

「そうかー。まあ、そんなもんかー」

「軽い調子で、三井が言う。続けて、」

「ラノベは飽和現象がやばいからなー」

と続ける。いつの間にか、佐々木まで居る。

「おはよう。遊君」

完全に俺はハブられたな。ひでえ。

「おう、おはよう」

「おはよ」

遊に続けて 一応俺も挨拶をする。一応は強調されているぞ！

「ああ、空太君も、おはよう」

単純に気づいていなかっただけ……だといいな。多分そうだよな。

「何の話をしていたの？」

という佐々木の質問に、三井が

「ラノベの話だよー」

と軽く答える。

佐々木が、

「ラノベか……私はアニメばっかで、ラノベはあんまり読まないからね……なんか、おすすめるある？」

佐々木が顔を遊に向けて言う。あい、俺らは話すなってことですね。

「うーん。とりあえず禁書読めばいいんじゃない？」

あれは万人受けする内容じゃないと思うけどな。と俺は思ったが、佐々木なら遊の薦めたものなら、なんでも、喜んで読みそうだなと思った。そこで、俺らは靴箱についたので、話を切りやめ、靴を変え、教室に行った。

教室についてからも、俺らは雑談を繰り返していた。うん。その

後も今日一日はのんびりとした平和な日々を過ごした。こんな日々が続けばいいな」と内心心の中で思った。

対北条防衛網（俺命名）はまだ続いているらしい。それがなければ、平和な日々ではなかっただろうな。

二十話！友人争奪戦の場所決めの際

次の日、火曜日も過ぎるのはあっという間で、五時限目に入っていた。学活の授業で、文化祭の飾り付けの場所決めをするらしい。かなりの数の女子が目をキラキラさせているな、と思いながら。俺は座っていた。

「はい、では、やりたい場所にネームプレートを貼ってください」

健介が教卓に立って言う。俺は、健介と、勇次郎と事前に打ち合わせをしておいたので、そこにネームプレートを貼る。幸い俺らが選んだ理科室前に貼る人は居ないようだった。

混雑した黒板が空き、いすに座る人が増えた頃、教室全体の人が見られたネームプレートの偏りに気が付いたようだった。教室内がざわざわし始める。所々からリア充氏ねとか聞こえてくる気がする。もしかしたら俺の心の叫びかもしれない。遊のネームプレートの横には、多くの女子のネームプレートが貼ってあった。ざっとみると、佐々木と三井の名前は、貼ってあった。

「おい、佐々木。競争率高いんじゃないのか？」

近くの席に居る佐々木に声をかけてみた。

「まあ、たぶん大丈夫だよ。負けるイメージがでてこないもん」

そりゃあ、イメージで負けてたら、本番はなかなか勝てないからな。

「そうか、頑張れ」

遊の周りの女子は一癖ある奴が多いなと思いつつながら、俺は佐々木を応援した。頭の片隅では、三井に勝ってもらえれば安心だという声もしている。でもさ、頭がいい奴はもう気づいて、他に行っているぜ。だってさ、

遊が貼ったところ、分担で一人のところだよ。

条件反射で、遊の名前があるところに貼ったのか、それに気づいている人は少ないようだった。恋は盲目。それほどこの場所に当てはまる言葉を俺は他に知らない。勝っても負けても阿鼻叫喚な状態になるな、と内心で思いながら、じゃんけんの推移を見守ることにした。

結論だけ言うと、遊が勝った。特に運が良い方じゃなかったと思うので、偶然だろう。ものすごくモテるとするのは、運が良いという項目の中に入っているのだろうか？そんなことを考えていても意味はないとわかりつつも、考えずにはいられなかった。じゃんけんの途中で、分担が一人の場所だったと気づくものが続出した。前々から気づいていた人は、遊が負けたときにどこに貼るかを見るために、遊と同じ場所に貼っていたらしい。じゃんけんに勝ってしまったらどうするつもりだったんだろうな。顔を下に下げ、落ち込んだ様子で、佐々木が席に帰ってきた。俺はその様子を見て、特に俺にできることはないな。と思いながら、学活での次の議題は何だったかな、と考え始めた。

二十一話！友人へのラブレター

「いやー今日は大変だったよ」

月曜日の放課後。俺は遊と教室から出ていた。

「まあ、おまえは女性恐怖症だから、一人の所に行くって言っていたしな。二人以上の所だと、じゃんけんとかで、女子が来る確率は高まるのか？」

「ああ、そうだよ。おまえ等と分担につきたかったけど、四人で分担のところがなかったからなー」

今日の場合決めの話をしながら、階段を下りていく。靴箱に入り、靴を取ろうとした、その時だった。

「は!？」

遊が声を上げた。靴箱を開けたときに、だ。遊の方を向くと、ヒラヒラと、紙が舞っていた。淡いピンク色の装飾。俗に言う、ラブレターだった。

遊がラブレターを読み終わるまで。手持ち無沙汰で、座って待っていた。数分位すると、

「ちよつと呼び出してみたいだから、行ってくるわ」

告白で、ラブレターで呼び出しね。古風なことですね。まあ、遊は携帯電話の使用率が異様に低いから。俺は基本会ってはずけど、三日経ってメールが帰ってきたとか、よくあるらしい。

それはそれとして、質問に答えることにした。

「おう、わかった、俺は先に帰っているわ」

まあ、相手側のことも尊重して、帰っておくほうが無難だろう。長くなるかもしれないしね。まあ、女性恐怖症の遊がそのお誘いを受けるかといったら、微妙なところだが。

「おう、すまん」

遊はそう言っつて、階段を上った。上ると言うことは、屋上かな、とかたわいもないことを考えながら、俺は家に帰ることにした。

家に帰ると、暇になった。とにかく暇だった。積んであるラノベから、一冊を手に取り、読むことにした。積んであるラノベにおもしろさを期待するのは、酷なことだけど、おもしろいかつまらないかのギャンブル感を楽しめるといふ楽しみ方もある……と思う。

一時間くらい経ち、結構今回は当たりだったなと思いつつ、比較的薄めのラノベを本棚の既読に入れた。そうしたときに、玄関のチャイムが鳴った。外を見るとそこには遊が居て、無理をしているように、手を振っていた。窓から話すのもどうかと思ったから、急いで階段を駆け降りた。何か予感があったのかもしれない。そう、悪い予感が。

玄関のドアを開け、遊を見る。いつもの飄々とした感じは消え失せ、げんなりとしていた。

「大丈夫か？」

俺は聞いた。

「ああ、なんとか」

そうか、答えられる程度には元気なのか、まあ、手を振っていたから当然といえば当然か、と心の中で思った。そうすると、

「時間いいか？」

と遊が聞いてきたので、俺はなにか不穏な雰囲気を感じながら、夕飯までなら、と、答えていた。

二十二話、友人宅

遊の部屋で、俺と遊は沈痛な表情をしながら座っていた。どちらから、言葉を発することもなく、静寂な時間が過ぎていく。

静寂を破ったのは俺だった。非リア充の悲しき性質なのか、他の人と居ると、何かを喋らなければ、といういたたまれない気持ちになるのだった。

「それで、今日なにがあつたんだ？」

帰宅後、事前に約束もせず、遊が俺の家にくるなんて珍しい。

要するに、ラブレターのこと何かあつたと考えるのが妥当な所だろう。

「ああ、今日、あの後さ、屋上に行ったんだよ」

途切れ途切れ、といった風に、遊が語り始める。

「そこにはさ、女子がたくさんさ、居てさ、」

遊は辛そうだ。声のトーンが段々と暗くなっていく。

「それでさ、屋上、女子、つてことで、軽くトラウマがさ、出てきたんだよ」

あれか……

「それでさ、その中に佐々木とか、三井も居てさ、俺がきた瞬間に……」

「誰がいいか選べ、だとさ……」

何だろう。このいたたまれない感覚は。辛い親友が居て、助けようと思つのに、頭のどこかでは、親友を罵倒する言葉……聞「エ……」
「誰も選びたくないって言つのにさ……」

イウナ……イウナヨ……壊れていくダロウ？

「もう、俺は、二年前で懲り懲りなんだよ！」

遊が叫びだしたのは判った。判っている……でも、ノウが、ニンシキ、シナイ。

「おい、大丈夫か!？」

遊が、俺の様子に気づいたらラシイ……多少は直ってきタ……

「ああ、辛いんだな……」

今の一言、俺の言葉は誰に向けられたんだろうか。遊？俺？振られる末路しか見えない女子？それとも……アイツ？

「まあ……な」

言葉の真意をはかり損ねているのか、煮えきらない様子で、遊は言った。言った本人ですら理解していないんだよ。聞かれた方が理解できたら天才だね。

「それで、どうなったんだ？」

まあ、一応終わりまで聞いとかなないと、気になって夜も眠れないわけではないが、寝付きが悪くなるのは事実だろう。遊は親友だから、それを気にするのは当然だ。と心の中で反芻する。嗚呼、崩れそうだ。

「結局さ、とりあえず保留にしたんだよ。で、お前に相談したいわけだが、昔こともあるしな」

成る程、きたときの表情が暗かったのは、二年前を思い出しているからか。リア充の親友ポジション、そんな人、所謂超人のような人なら、ここで確実に的確なアドバイスをするだろう。だが俺は、非才だ。

「まあ、お前が思った通りに行動するしかないと思うよ。二年前のこともあるから、そう簡単に行かないだろうけど……」

月並みな答えしかできない。所詮凡人。こんなところでも、絶対的な格差を見せられた気がした。

「そうだなっ。有り難う」

何のアドバイスにもなっていないだろうにと、自嘲しながら、
「じゃあな」

俺は遊の家を後にした。

遊の家のドアを開け、普通っていた中学校に目を向ける。アレがあるまでは、人生で一番楽しかったな、と思える場所に……

二十二話、友人宅（後書き）

次回過去編入ります。

二十三話、二年前そのいち

二年前。俺と遊がそう語る出来事の少し前、俺ら三人は、中学へ行く道を楽しそうに歩いていて。周囲から冷やかされることはあっても、俺らはこれを楽しんでいた。それほどまでにこの三人での行動は……楽しかった。

なにをするにも三人一緒。そうとしか思えない関係だと、自分たちで思っていたし、周りもそう思っていたみたいだった。ボードゲームは三人で切磋琢磨し、カードゲームでも、テレビゲームでも、スポーツでも、三人でやっていた。

卓球だって三人だったな。俺は粒高、遊はドライブ主戦型、アイツはカットマン。アイツだけ性別は違ったけど、三人で体育館を借りてやることも多かったな。ああ、アイツを求めるから、俺たち二人は部活に入らないんだな。と暗に理解した。

「おい、遊君！ 早い！ 待って！」

「お前が遅いんだよ、早くしろ」

名前は何だっけか。もう思い出せないのかもしれない。自分でセーブしているのかもしれない。

「空太君は大食らいだねえ。まあ、小食より、たくさん食べた方が、男らしいよ」

「そうか、？」

そうだ、このことから俺は、たくさん食べるようになったんだ。

ああ、今じゃこんなに太ったな。

「ちよつ、遊君！ 適正レベル+3レベルの敵とか、鬼畜すぎる！」

このころから遊は、鬼畜GMだったな。アイツのダイス運が強かったんだな。少し思い出した。

「おい！ 遊！ ！ 空太！ うるさい！ 廊下で立ってる！」
授業中に騒ぎすぎて、廊下に立たされたこともあったな。アイツは喚くのはすごく得意で、アイツだけ早く戻った覚えがある。当時はムカついたっけな。

「おい、。自重しろよ」

「え！？ パワ ロで、165km変化量13スタコンAAくらいふつうに作れるでしょ？」

「無理だ」

ゲームの腕は天才的だったな……格ゲーは勝率9割5分を切らないし、音ゲーは大体を3日でマスター、UFOキャッチャーの取りすぎで店から出入り禁止くらったこともあったな。

昔の思い出を振り返るのも悪くないな、と思いながら、俺は回想をやめた。これ以上回想しても、意味がない。そう自覚している。

「なんなんだろうな……」

あの頃と比べると、今の世界は色あせたようにしか見えない。健介も勇次郎もいい奴だが、何かが、そう、違和感が、常につきまとってる。

纏っているような違和感。その状態で過ごす日々。過去を知る人たちで、自分たち二人に近づく人は何人？ 教室で、遊に近づくかない女子の殆どは何処の中学出身？ わかっている疑問を、昔の日々と今の現状を思い、歩けば、そこには自分の家のドアがあった。開けようとすると、鍵がかかっていた。仕方ない。鍵を開けた。

二十四話、二年前それに

「私、遊君と付き合うからっ」

朝、登校時、俺は一瞬頭が真っ白になった。目の前の沙羅が、俺の頭では理解できないことを言ってくる。隣にいる遊は、顔を赤らませながら、

「まあ……な……」

と、肯定している。倒れそうに、叫びそうに、走り出しそうに、数々の欲望を俺は押さえた。その中には、今ここで沙羅を襲うというのもあった。だが、俺は我慢した。何故かはわからない。強いて拳げるならば、一般常識というものが、俺の頭の中を回りだしたからだろうか。回っても益にならないのに、益になると信じて踊り回る。一般常識はそんなものなのだろう。そんな、わけがわからない脳内思考を経た後に、

「おめでとっ……」

少々複雑な、贅辞の言葉を贈った。

それからの日々も、今までとは余り変わらなかった。三人に俺が入れないことが増えたが、以外にも俺も入り、三人で遊ぶ方が多かった。俺がその環に入れるだけの、おもしろい奴なのか、ただの情性なのか、俺には判断がつかない。

遊と沙羅が付き合い初めてからは、俺は魂が抜けたようだった。自分でも理解できるほどの、燃えつきぶりだった。だからなんだ、と言われるかもしれないが、ここで、それは重要なことだと、俺は感じた。何だろう、二人を眺めるのが増えた気がする。ほかのクラスと話を回数も減った気がする。教室の後ろから、教室全体を見渡していた気がする。なんだろう、これが非リア充への入り口なのだろうか、時々馬鹿にしていた、休み時間は眠っているような奴

も、事情があるのかな、と頭の片隅で感じた。

俺が悲しみに打ちひしがれているときにでも世界は回るらしく、遊と沙羅が付き合い始めてから、既に一週間が経ったようだった。自暴自棄になりかけていたが、そんな生活にならずにすむのは、遊と沙羅のおかげ。皮肉にも彼らは、俺を規則正しい生活に導きたいようだった。そのせいで、やけ食いとか身体に影響のありそうなことができず、仕方なくラノベをやけ買いした。我ながら意味が分からない。

学校の帰り道、俺はそんなこんな回想をしているのは、隣にその遊と沙羅がいるからだ。日は少し、落ちている。今日は部活がないので、早めに学校から帰っている。

「おう、今日はどーする？」

遊が聞いた。部屋には積み重ねたラノベがまだ十冊以上残っている。これでも半分程度は読んだらしい。本を読むとその世界に没頭するのが、余り記憶がない気がする。内容は覚えているが。要するに、ラノベ読みたいなーってことだ。

「遊君がいるなら、どこでもいいよー」

俺が横にいるのに、思いつきのろける。仕方ないか。仕方ないな。

「そうかー、なら久々に、ボードゲームでもするか」

そういえば、TRPGやってないなーと俺は思った。遊と沙羅のために久々にGMでもやってやるかな、と、俺は考えた。そんな俺の考えたことがわかったのか、

「TRPGでもやるか」

と遊は言った。まあ、冷静に考えると、学校からの帰宅した後の時間でTRPGをやるとか、時間がかかりすぎて無理だろう。と考えた。こうしてみると、自分で考えることは、主観的にしか、観れないな、と感じた。

「もう時間的にむりでしょー」

沙羅が言った。

「それもそうか」

遊が同意する。俺は無言でいた。それを肯定と受け取ったのか、遊と沙羅が話を続けた。

「結局どうするの？」

沙羅が聞いた。

「今日はもう解散でいいっしょ」

俺は言った。俺が先に言えば、この二人も心おきなくデートにも行けるだろう。そんなことを思うのは、俺の自意識過剰だろうか。自分で自分は主観的に観れないな、と、自嘲する。

「そうかーわかった」

そう、沙羅は言う。だが、そんな判断に不服なのか、

「空太、今日は久しぶりに、俺とおまえサシで遊ぼうぜ」
そう遊が言うのだった。

二十四話、二年前そのに(後書き)

過去編はかなり多めになりそうです。たぶん。

二十五話、二年前そのさん

俺と遊は二人で階段を登っていた。現在地は遊の家。階段を登った先には、遊の部屋があった。遊がドアを開け、二人ではいる。俺が気まずそうにしていると、

「まあ、適当に座ってくれ」

と、微妙にいつもと違うような雰囲気です。遊が言ったのだった。

俺は何故遊と二人でここにいるのだ？ 確かに遊に誘われたからだ。だが、その場で断ることもできたはずだ。何故俺はついてきたのだろうか？ 無言の部屋で、俺は自問自答した。

「ああ、俺と沙羅の件だ」

遊が言った。俺は無言を貫き通す。なにせ、喋ることがない。今から遊ぼうよみたいな雰囲気は微塵もなく、重い空気だけがその空間には漂っている。

「どう思っているんだ？ 俺らのこと」

遊は率直に聞いてきた。なら、俺も思ったとおりに、オブライートを何十にも重ねながら、答えようか。

「おめでとうって思っているよ。傍からみてもいいカップルだと思うな。お幸せに」

自分でもわかるほどに月並みな言い方だった。遊は、「そうか」とつぶやき。

「おまえはこれでいいんだな？」

と、言った。背筋になにか怖いものが駆け登った感覚がして、体感温度が二度程度下がった気がした。何故遊がこんなことを言うのか、それはわかってる。わかっているが、返答に値する解は何処にもない。作るしかない。解を。

「これでいいと思っているよ。なにせ、女子にモテモテな遊と、男子からのアイドル的な人気者の沙羅じゃないか。俺が出る幕なんてないし、二人が俺と仲良くしてくれるので、もう感激で胸がいつぱ

「だよ」

オブラートに包みすぎて変な台詞になったな。と自覚しながらも言った。

「おまえ自身は俺らの関係がこれでもいいんだな？」

なんだろう、なんか、今回は声に怒気が入ってたと思った。なるほど、もうこっちのことはバレてるのか。でも、いいじゃないか。もう終わったんだ。おまえに俺の好きな子をとられて、終わったんだよ。生活だって、おまえ等がいないと、一層わびしい者になる。なんだ俺は？ 寄生虫か？

「ああ、そういうことだ」

心の葛藤は無視した。気にしたら喧嘩になる。ぶつかり合えない。何故だろうか。

「そうか……」

遊は寂しそうにつぶやいた。その顔は……後悔の色が見えた。わかっていてと考え、俺は話す。

「おまえが気にする必要はねえよ。おまえは十分リア充っぽいんだ。自覚を持て。俺になんか気にするなよ」

明確に二人で差がでた瞬間だったと、俺は思った。俺はもう向こう側には行けないし、遊はこっち側にはこない。上辺の人間関係が続き。卒業への道をとる。そして、二人はこれからも一緒に歩き、俺は一人で孤独に歩く。

「朝日が射し込む窓。時計の針は6時を刺している。
胸糞悪い夢だったな……」

誰もいない部屋。一人つぶやく。時間的には二度寝もできる時間だ。悩んだ。もし寝たら？これから先をもう一度見たいのか？いや、向き合わないといけない。その後を、思い出すことにした。

二十六話、二年前そのよん

俺と遊が二人で話し合ってから、二週間だろうか。が、経った。俺は遊とは以前のように、いや、他人から見れば以前のように、接しあつた。沙羅は、多少気にしていたようだったが、気にせずに、遊といちゃいちゃしていた。それにより、俺の精神力は休まる暇もなかった。

登校時。今日は俺が家から出てくるのが遅すぎたのか、遊も沙羅も先に行っている。人混みというほど混んではない道を、俺は歩いていて。久々に精神は休まったが、虚しさは残った。俺はなにをしたいんだろのかな、と、自嘲する。

数分、十数分、どちらでもあまり変わらないだろう、が、過ぎた後、俺は教室に入った。挨拶してきた人だけに軽く挨拶を返す。そうして、俺は自分の席について、準備を開始した。もちろん、朝読書の。

放課後までスキップして放課後。卓球部は今日も休みだ。休み多いとほかの部活からねちねち言われるんだよな、と、考えながら、教室を後にした。脳内で悪いのは、卓球部の顧問の教師ということにしておこう。

何だろう、ただ単に気分ではない、と言った方が正しいのか。わからない。ただもやもとした気分を落ち着けるため、何か解決策があるのではないかと考え、俺は階段を上った。目指すは……屋上だ。

カツ、カツ、かつ、かつ、カツ、俺が階段を上る音が聞こえる。金属の階段は上履きと音を響かせる。目の前の扉の隙間。そこから光が漏れ出ている。ギィィィィィ。ドアを開けた。見えたのは、宙に舞う少女。助けようとする男。………落ちた。

俺は駆けだした。よく見えなかったが。いや、目をそらしていたのか？わからない。わからない。だが、俺の脳は、落ちた少女が沙

羅だと、わめきたてていた。ドン！ ドン！ 俺の上靴が地面を踏む音は響く。そして、落下している少女が落ちた外壁に……たどり着いた。そして、ドシャツ。音がした。落ちた。ぶつかつた。倒れこむ俺と、泣いた遊。少し経ち、そこには、ピーポーピーポーと、サイレンの音が鳴り響いた。

気がついた。誰から言葉をかけられることもなく。俺は起きあがった。白い天井。白いカーテン。校舎の匂い。保健室。俺はそう判断して、起きあがった。

「起きたのね……」

そう言ったのは、保険室の先生。

「行つてきなさい。ここから病院は近いでしょう？ 遊君は、起きたら行くと思うわ」

そういわれると、「ありがとうございます」と言つて、俺は駆けだした。階段を下りて、昇降口を抜け、グラウンドを横切る。だが、何故だろう。もう、終わった気が、頭の片隅でしていたのだった。

二十七話、二年前その二

病院に着いたときには、隣には遊が居た。息を切らしながら「ハア、ハア、追いついた、ぞ」

等と言っている。悲しげな顔を浮かべた俺に、遊は怪訝な目した。二人の離れた立ち位置は、何故か反転し、混ざりあつた気がした。

病室には入れなかった。沙羅が拒絶したらしい。遊が必死になつて、

「入れてください！」

と言うのを、必死に医者と沙羅の母が押さえつけていた。俺はそんな光景を見ながら、ただ呆然と立ち尽くした。沙羅の命に別状は何もなく、精神的にも安定している。医者の人も、何故自殺したのかがわからないほどだったという。俺は遊に屋上で何があつたのかを聞くことはできなかった。聞けなかった。トラウマを背負つたのは俺だけじゃない。遊だって、悲しいのだ。それを察せずに、聞いたら後には戻れない……

静寂が続き、仕方なく俺らは家に帰った。不思議と遊は何も言わなかった。あいたいという願望は存在しているが、会って何を言うか、何故あえないのか、という感情の方が大きい。

「大丈夫か？」

隣に居る遊が聞いてきた。なんで自殺した彼女の彼氏が、友人なだけの俺を心配するんだよ、と客観的なことを考えた。主観的に考えれば何故そうなったかに思い至ることなど、極簡単なことだ。

「大丈夫だ」

一言だけ答えた。遊はそれに対して「そうか」と一言残しただけで、その後、何も言わなかった。

家につき、夜になり、朝が来た。今日も学校へ行く日々は続く。

昨日とは明らかに変化を残して、日々はつながる。

俺と遊、二人での登校。一人分の空白が残る登校。無言が続く登校。気まずい雰囲気の流れている。周りの人々は「あれ？ どうしたの？」と聞いてくる。「なんでもない」と、遊が答える。俺は果然と歩くのみ。特に何もできない。プラスチックの人形。脆いのに、動かなく、何もできない。嗚呼、俺らを助けてくれよ、沙羅。

不思議なほどに、沙羅が自殺したことへの嫌悪感も、助かったことによる安堵感もなかった。遊と沙羅がつきあう日々が過ぎて、沙羅への好きが風化したのかな、と自嘲する。朝のHR、沙羅は、“家庭の事情”で、転校した。それを担任の教師が悲しそうな顔で言う。クラスはざわめく。ムードメーカーの転校。クラスに落とした陰はどれほどのものなのか。俺にも遊にもまだわからない。遊に質問できなかつたクラスメイトが俺に質問してくる。「わからない」等と答えながら、呆然と過ごしている。そのまま、何も起こらず、その日々は終わった。俺と遊に悲しさとトラウマを植え付け、俺と遊に微妙な距離感を持たせ、代わりに残ったのは何？

たくさん思い出。

でも、思い出なんて何も力にはならない。何でだろうな、沙羅ともう会えないのに、妙に冷めた自分が居る。何なんだろうか。まあ、わかるのはただ一つでさ、初恋は、終わったよ。

二十八話、ラブレターの行方

「さて、学校に行くか」

俺は誰もいないところで、一人、呟いた。母と弟の声が喧噪として、耳に伝わる。

「行ってきます」

家の人に聞こえたかはわからない。聞こえた可能性は低い。なぜならか細い、消え入るような声だったから。それに気づかず、空太は家を後にした。

「おはよう」

「おう、おはよう」

挨拶をして、二人は歩き出す。

「屋上のは全部断るよ。受けたって、相手を幸せにできるとは思えない」

遊ははっきりと言った。曖昧な自分とは大違いたが、根本的には何ら変わることはないのだろう。

「そうか」

俺は一言呟いた。あいつ等は所詮知人。よくて友人だ。知らない奴もいるだろう。

人間をランク分けする。誰だっけるだろう。大事な人が自殺未遂をしたから、気に病むのだ。見ず知らずの人が猟奇殺人されて、報道されたとして、俺はそれを二年の間も覚えているだろうか？

確実に覚えていない。そんなもんなんだ。ランク分けで、自分の価値観は決まる。

考えごとをしているうちに、遊への会話の答弁が疎かになっていったらしい。

「大丈夫か、ブーツとして」

そう遊が伝えてくる。

「ああ、大丈夫だ」

そう一言答えた。

遊が朝から一人ずつ断りに行ったという噂は、瞬間に広まった。律儀な奴という評価ばかりで、貶すものは皆無だった。誤り方も誠実なものだった。俺も遊が佐々木に謝るところをみていたが、あれほど誠実な断り方を、俺はほかにみたこともない。

冷静に考えると、他人が告白を断るのを目にすること事態が希だと思に至った。

何人かクラスの人が「何で断ったの？」と、無粋なことを聞く。近くにいた佐々木が反応を見せる。佐々木の方を見ず、遊は質問してきた女子を見た。

「俺がさ、まだまだだからだよ。昨日告白したすべての女子の真摯な思いには心を動かせられたけど、まだ僕自身が、その人たちの気持ちに答えられるだけの人間じゃないんだ」

そう、答えた。良い奴じゃないか、俺は素直にそう思った。遊の言葉が終わった時、教室は静まり返った。だが、数刻経つと、元の喧噪に戻った。そのまま……放課後になった。

「遊、帰ろうぜ」

俺は言った。

「ああ、わかった」

そう、遊は答えた。何気ない帰りの挨拶。溝があるのかはわからない。

「終わったのか？」

特に何が、といれずに質問した。

「ああ」

遊からは、ただの一言だけ帰ってきた。十分だ。なぜか俺は満足した。

「そうか」

そう俺が言った。そして、俺らは歩きだした。数歩歩く。音が鳴

る。どこだ？ ドアだ。 どの？ 教室の。

教室のドアが何者かの手によって、ものすごい勢いであけられた。「マツハ越えているかもな……」教室の中から、くだらないつぶやきが漏れる。ドアが開く。出てきたのは……

「遊君！ 逃げてばかりで、そんなことでいいんですか！？」

北条……だった。

二十九話、幻想

いきなり現れた北条。上げられた大声。一瞬、教室の喧噪はなくなった。誰もが足を止めた。

「逃げてなんかいませんよ」

軽く笑みながら、遊は言った。それが合図となったのか、教室内の時がまた動き出す。

「逃げてないならなんだって言うの？」

北条は質問を重ねた。遊の隣にいる俺はどうすることもできず、ただ立っている。触れてはいけない空気。それを遊と北条は作っていた。

「決別……でしょうかね。過去と向き合って、まだ僕は人とつきあうほどの人間ではないと、自覚したんですよ。それになれるように、全力で成長していきたいですね」

なんだろう。遊が言った言葉は、霧のようなものを感じた。いや、最近の遊は、周りに壁と言うほど立派ではない、霧を築いている。

「そう、ならいいわ」

なにがいいのだろうか、俺はそう思う。わからない。何だろうか。「私が告白したらどうするの？」

そう、北条は聞いた。なんなんだろうか。なぜこの場面で聞く？俺には理解ができなかった。

「断るさ。もちろん」

そう遊は答えた。当然だろう、と俺は思う。

「そこが逃げているって言うてるのよ。相手のことは何も考えずに自分の都合だけで告白を断る。それで逃げていないって言えるの？相手の感情も考えずに、自分はまだ相手に及ばないって言う幻想に逃げているだけじゃないの？」

核心に迫るような感じで、北条は言った。自分にも当てはまるのだろうか……と、俺が思索し始めると、

「横のデブもそれでいいの？」

と、俺のことまで付け加えてきた。俺はどうなんだ？ 遊はリア充だという幻想を持って、逃げていただけじゃないのか？ 俺は二年前の後に、夕に何かしたのか？ 好きな奴が自殺して悲しいのは、俺だけじゃないのか？ 遊はどうなんだ？ あいつは沙羅をどう思っているんだ？ わからない。俺たちは二年前から何も進展していないのか。その場で、悲しき偽りの友人を演じているだけなのか？

俺が思案していると、隣から怒鳴り声が聞こえた。

「おまえに俺たちの何がわかるんだ！」

遊が言い放った。俺は、そうだ、と同意した。おまえに俺たちの何がわかるんだ！ 自分の心の中で反芻する。二年前の悲しさがおまえにわかってたまるか。俺たちが修復した時間は俺たちだけのものなんだ。

「遊君は、逃げているだけで、デブは何も言わない。あんたらそれでいいのかよ」

吐き捨てるように北条が言い、そのまま教室から出ていった。

「なんだったんだ……」

そう遊がつぶやいた後、俺らは教室を後にした。

三十話、帰宅

どうしたものの、俺と遊の間には、なんとも言えない沈黙が続いていた。どちらからも言葉を発することはなく、心に楔を打ち込まれたような沈黙が続く。

北条に言われたことがそんなに心に刺さったのだろうか。わからない、俺にはわからなかった。俺自身にはそれほど刺さっていないと思う。二年前の事件。それを考えながら生きていて何が悪いのだ？俺はそればかり考えていた。そのせいでなのかはわからないが、注意がおろそかになってた。それを見かねた遊が、

「危ないぞ、空太」

と、忠告してくれた。

「お、サンキュ」

自分で注意がおろそかになってたことを再認識した。このまま車に轢かれたとしても、轢いた人に文句は言えまい。

「どう思う？ お前は」

会話が始まった気がしたので、俺は遊に聞いてみた。遊は察しがいいはずだ。これで伝えたいことは伝わるだろう。

「わかんね」

単純に一言で答えられた。

「そうか」

と、俺が一言だけで返した。やっぱ、いきなり言われてもわかんねーよな。と、心の中で遊に同調した。だが冷静になって考えてみると、遊は、俺と違い、北条の意見を真剣に聞いているということ、を、なんとなくだが理解ができた。そうか、俺みたいに頭ごなしに否定しているだけじゃないのか。なんとなくだけだが、そんなようなことを頭を横切る。

「でもさ、」

遊は続けた。何がでもなのだろうか？

「俺は逃げているとは思わなかったけど、逃げていると思われるような行動をしていたってことだよな」

自分だけじゃ世界は廻らないのだ。そう、おれは実感した気がした。自分からの自分への評価。それだけでは、自分という名の物語を紡ぐことはできなくて、他人という名の異分子が流入してこそ、自分という名の物語なのだ。自分だけじゃダメなのか。愛されなかったんだからいいじゃないか。俺は愛されたいんだ。

「逃げたくはねーよ。カッコわりい」

格好いいと格好悪いで判断していいのかは、俺はわからなかった。ただ分かったのは、俺は愛されたかっただけ。愛されている遊はなにを贅沢しているのだろうか、と思った。

「お前が羨ましいよ」

素直に俺は言った。

「なんでだ？」

遊は聞き返してくる。当然だろう。意味が分からないだろう。ハハハハハハ

答えられない遊をあざ笑った。俺の顔を見て、苛ついたのであろう。俺の笑い顔はそんなにいらつくような顔なのか、と少しだけショックを受けた。

「なんなんだよっ」

軽く遊は俺をつついてくる。軽いスキンシップだな。

「それだけお前は恵まれているってことだよ」

自分も十分恵まれているのだろうか？ 他人から見ないと恵まれているかはわからないだろう。そう俺は実感した。

その後、俺らは、軽い世間話をしながら家に帰った。ラノベの話は意外と尽きないし、アニメの話題だって尽きない。まだオレらは一介の高校生なのだ。オタク趣味を謳歌したっていいじゃないか。オタク趣味を謳歌するのだって、青春を謳歌するのだって、大して変わらないだろう。そう思いながら、俺は家に入った。

三十一話、決別

朝起きたとき、寝覚めがすごく悪かった。なぜだかはわからない。ただわかるのは、今日は不吉なことが起きそうだということ。

「最悪だ……」

俺はつぶやく。誰もいない一人のベッドの上でつぶやく。ベッドから転がり落ちて起きた時刻は7時前。急ぎ支度をして、何とか学校に行く時間ぎりぎりに間に合わせる。

「いつてきまーす」

飯も腹八分も行かぬ、腹五分くらいしか食べずに、俺は家を出た。今日は午前中はすごく腹が減るんだろうなと思いながら。寝起きが悪くて悪いことが起きそうだと思ったのを無視しながら。自分の記憶を忘却という無視をしながら……

家を出て感じたもの。一瞬わからなかった。すぐに気づいた。遊がない。

珍しいという騒ぎではない。風邪でも引いたのかと考えたが、それなら前日に連絡してくれる筈だ。あいつは無駄なところで律儀だからな。用事も……前述と同じ理由で無し。いや、急な用事か？ まあ、前例がないことだからわからない。とりあえず遊の母さんに聞いておこう。

聞いたら遊はもう学校に行っているらしい。なぜだろうか。わからない。まあ、気にしても仕方がない。俺は学校に向かうことにした。その日の登校は注意力が散漫になっていたらしい。結構な数の人から注意された。注意しないと。そう思いながら、俺は学校へたどり着いた。

ざわざわと、教室から話し声という名の喧噪が聞こえてくる。そ

んなものを気にする必要はない。俺は遊の席に行き、

「おはよう」

遊に挨拶をした。まあ、先に行ったことについてはわざわざ聞くこともないだろう。というか、前例がないものの対処法ほど難しいものはない、ということだ。

「おう、おはよう」

遊が挨拶を返してきた。つもる話なんてものはない。なんか、いつもと違う動きだな、と、自分で苦笑しながら席に着いた。そして朝の準備をした。多少忘れ物を見つけた。どうしようか少し悩むが、気にすることもないのである。机の中からラノベを出して、読み始めた。今日は日常ものか……

「俺は二年前と、決別する」

休み時間。遊が急に俺に言ってきた。決別？ 訳が分からない……こともない。昨日の話を聞いて、二年前のことはなにも考えずに、高校生活を満喫しようと思ったのだ。遊の考えを反対する権利は俺にはない。だが、

「その決別に俺は入っているのか？」

これは聞かすにはいられなかった。それに対して遊は一瞬困ったような目をしながら、目を伏せ、

「ああ……」

と、小さな声で呟いた。

三十二話、ぼっち

決別……それを言い換えると絶交だろう。遊が二年前との決別をした後、俺と遊が話す頻度は明らかに減った。それと平行して、教室内の俺のボツチ化は進んでいった。健介や勇次郎は喋ってくれが、それ以外に喋る人がいない。昼飯を一人で食べることも増えたとし、登校、下校、一人の時間が明らかに増えた。

教室、授業。俺は苦悩していた。なにより先生の出す問題が間違っているのだ。言った方がいいが、言うのかが微妙な雰囲気にかまれている。

誰かが言った。誰だかはわからない。何故か俺は思考を始めた。先生と誰かの話で授業は少しつぶれるだろう。その時間に思考したって、誰も文句は言うまい。

俺は、二年前となにも変わっていないのか？ それだけが俺の頭の中をぐるぐると廻り始めた。二年前、遊と沙羅がつきあい始めたときから、俺はなにも進展していないのだろうか？ リア充と話せなくなった非リアの末路はこんなものなのだろうか。俺にはわからなかった。なにも、わからなかったのだ。

憂鬱な昼飯。なにも意味がない時間。暇な休日には、ラノベを読んだ。ネットをした。家にいる時間が増えた。俺はなにをしているのだろうか。

「おい、大丈夫か？」

健介が聞いてきた。嗚呼、もう授業は終わっていたのか。気づかなかった。

「ああ、大丈夫だよ。ちょっとボーツとしていただけだ」

健介は、「そうか」と、一言つぶやいただけで、その後遊のところに行った。どうしようか、どうしようもないのか。わかんねーな。俺は逃げていただけなのか？ 二年前のあのときからなにも進歩がなかったのか？ 思考がループしているな。はあ、疲れた。

憂鬱な授業が過ぎ、憂鬱な昼食の時間。憂鬱じゃない時間なんてあるのか？ 寝るときだけは昔から一人だな。当然だな。

「はあ……」

一つ、ため息をもらす。これ以上思考しても意味はない。寝よう。俺は寝た。だが、寝た場所が食堂だということを忘れていた。

一人で食堂で寝るとか……傍からみれば、かなり痛いよな、俺。完全に寝た。

起こされた。昼食の時間は……まだ終わっていないかった。誰が起こしてくれたのだろうか。目の前にいたのは……北条だった。

「遊君は逃げるのをやめたのに、貴方はふてくされているだけなの？ それでいいの？」

それだけいって、去っていった。俺が何かを言い返すことなど、はじめから期待していないようだ。事実、俺はなにも言い返す気がなかった。だってさ、どうだっていいじゃないか。俺の人生だ。文句はないだろう。勝手に人生を決めつけられてたまるか。そんなふうにさ、他人に誘導された人生は楽しいのか？ 本当にそれでいいのかよ、遊。

三十二話 ぼっち(後書き)

次回最終回です。

三十三話、文化祭

三週間程度すぎた。今日は、文化祭だ。祭り特有の喧噪。その中俺は、一人だけ沈んでいた。一年は特に出し物があるわけではないので、俺は暇だった。健介は実行委員だったので、俺とは回れない。勇次郎は部活で出し物があるらしい。友人が少ない俺は、回れる人がいなかった。ひとりで、人混みをぶらぶらとぶらつく。特にやることがない一年の文化祭。青春ってこんなもんだよな。周りを見つとも、目を背けた。

ぶらぶらすること十数分。俺は見つけた。いや、見つけてしまった。遊。隣には手をつないでいる……北条。

「次は、どこに行く？」

遊は聞いていた。文化祭特有の喧噪の中でも、なぜか聞き取れた。理由はわからない。逃げた俺に立ち向かった人の成功を見せて、楽しいのだろうか？ 答えてくれよ。誰でもいいよ。

「次回つたら、私は、ちよつと係りに戻らないとなんだつ、ごめんね」

北条が言っていた。幸せそうだな、と俺は思った。同時に、俺には絶対にたどり着けない境地だと、理解した。無理。その言葉が頭をよぎる。事実だ。仕方がない。あきらめて俺はその場を後にした。俺の精神が持たないのかもしれない。遊が「おうつ、空太じゃないか」と言っているのは、聞こえなかった。いや、聞こえなかったふりをした。悲しかっただろうか、友人は。決別当時よりは、俺に話しかけてくれるようになった友人は、もう親友ではない友人は、俺が拒んでいる友人は、俺は、友人の元から去った。喧噪の中に、俺は逃げた。

逃げた。逃げた。逃げた。見えた。なにが？ なにが？

「え！？」

俺は叫んでいた。周りの人が一斉に俺を振り向く。俺が叫んだ原

因も俺を振り向く。

「沙……………羅……………?」

俺は言葉を発した。周りの人々の興味は俺から薄れていく。ただ一人をのぞいて。

「空太君……………?」

なぜ沙羅がここにいるのだろうか。俺にはわからなかった。いや、普遍的に考えれば、文化祭を見に来たのだろう。

「太りました?」

俺はずっこけそうになった。いや、たぶん太ったけどさ。うん、二年前に比べて確実に太ったな。絶対太った。悲しいな。

「遊君と一緒にじゃないんですか?」

ああ、昔は仲がよかったな。完全に過去の話だ。今は……………なんなんだろうか。

「遊なら彼女と文化祭を回っているよ」
言った。

「そうですか」

沙羅は走り去っていった。少し走ってから、こちらを振り返り、

「ありがとう!!」

そう、叫んでいた。そうか。と俺は納得した。そして、最後に思った。来年こそは、誰かほかの人と回りたいな。

三十三話、文化祭（後書き）

これで、僕が書く、リア友！ー友人が、リア充だ！？ーは完結となります。最後まで見ていただき、誠にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9735v/>

リア友！－友人が、リア充だ！？－

2011年9月24日03時15分発行